

自然言語をめぐる秩序 言語化と概念化

著者 船山仲他

出版社 開拓社

出版年 2020年9月10日

ISBN978-4-7589-1829-9



評者 石塚浩之

著者の船山は、1970年代よりロシア語統語論を専門とする言語学者として研究を進めつつ、並行して日英間の会議通訳者として実務の世界でも活躍してきた。船山が通訳者としての実践と言語学者としての思索の交点を探り始めたのは1980年代のことであり、これは黎明期における通訳研究の一隅を照らす試みとなった。その後、船山は日本時事英語学会（現・日本メディア英語学会）関西支部の有志を集め、同時通訳論研究分科会を主宰した。これは近藤正臣、水野的らを中心に東京で活動していた通訳理論研究会と合流し、日本通訳学会（現・日本通訳翻訳学会）の源流となった。以来、船山は日本の通訳研究を牽引する一人として、新たな分析装置を次々と提案してきた。こうした歩みを知る者であれば、おそらく本書は船山の40年近くに及ぶ通訳研究の集大成であると予想するだろう。しかし、本書は単なる総括研究ではない。これまでの研究を土台にしつつも枠組みを拡張し、新たな理論的境地を示すものである。

本書は、コミュニケーションのために言語を使う実態に関するモデルを提案することを意図とし、これを「言語コミュニケーションの概念-意味相関モデル」（以下、相関モデル）と呼ぶ。相関モデルの要をなすのは“概念”と“意味”の区別である。ここでいう“概念”と“意味”は、このモデルで独自に位置づけられた術語である。相関モデルにおいて、“意味”は言語形式と結び付いたコード的意味を指し、“概念”はコミュニケーションの参加者である話し手と聞き手の頭の中にある思考内容のことと位置づけられる。すなわち、“意味”とは社会的に共有される言語の体系的知識であるのに対し、“概念”は常に個人の頭の中にあり、言語理解を支えるものである。コミュニケーションは“意味”のやりとりを基盤とし、参加者がそれぞれの解釈を推論することにより成立する。相関モデルが目を向けるのは、コミュニケーションにおける認知的側面にあると考えられるが、社会的に共有される“意味”と個人に属する“概念”をコミュニケーションにおける二つのレベルとして区別することにより、このモデルにはコミュニケーションの社会的側面と認知的側面の双方が組み込まれることになる。

ソシュール以来の近代言語学は、言語体系をコミュニケーションから切り離すことによって展開してきた。本書は、この100年以上にわたり連綿と受け継がれてきた伝統的な視点を見直しコミュニケーションの実情を前提として人間の言語使用を見るこ

とを提案する。コミュニケーションを前提に言語を語ることは、新たな試みではない。近年の語用論の隆盛をみれば、むしろ、これは時流に沿う方向である。発話解釈の認知プロセスに関して、関連性理論という成果があり、これは相関モデルにも大きな影響を与えていると思われる。しかし、関連性理論が考慮するのは、常に一人の言語使用者の頭の中であった。これに対し、相関モデルの独自性は話し手と聞き手双方の頭の中を同時に対比しようとする点にある。

本書は5章から構成されている。第1章では、相関モデルの基本的な考え方が提案される。第2章では、発信者の立場を中心に扱い、“概念”の部分的外部化としての“言語化”について語られる。第3章は、受信者の立場を中心に、言語表現を契機とし実行される“概念化”を扱う。そして、第4章では、“言語化”と“概念化”が反転可能なプロセスではなく非対称であることを指摘し、コミュニケーションの社会的側面についてのとらえ方が示されたうえで、語用論の位置づけが確認される。ここまで、通訳翻訳に関する言及はほとんどないが、最終の第5章では、相関モデルの観点から、同時通訳を可能とする仕組みが説明される。つまり、相関モデルの提案は、コミュニケーションを前提とし、近代言語学の枠組みを問い直す試みであると同時に、通訳研究における新たな理論的枠組みの整備でもある。また、本書のタイトルにあえて〈自然〉という表現を含んだ理由について、船山は「自然と人工の違いに目を向けるため」と述べている。ここから、自ずと機械翻訳と人間による通訳翻訳の違いも、本書から展開される議論の射程となっていることがうかがえる。

これまでの船山の通訳研究の特徴として、(1) 非言語的中間表示の想定、(2) 記述の枠組みの提案、(3) 同時通訳記録の実証分析を挙げることができる。(1)は通訳の認知プロセスに焦点を当て、言語的処理を超えた心的表示のあり方をどう表示するかを模索するものであった。これはセレスコヴィッチの〈脱言語化〉の発想との親和性を保ちつつ、これを理論化する試みであったともいえる。言うまでもなく、この視点は、相関モデルにおける“概念”と“意味”の区別として受け継がれている。(2)は、認知ファイル(1996)、認知タグ(2002)、概念的複合体(2005)といった分析装置を次々と提案してきた事実を指摘するものである。これらはいずれも、発話処理の非言語的側面に焦点を当てるものであるが、これらの分析装置を年代順に振り返ると、常に理論的枠組みの拡大へと展開してきたことが分かる。そして、(3)に関しては、本書で扱われていない。これは今後の通訳研究における課題である。本書に示された課題を受け止めることができるか。これは、今後の当学会のあり方、とりわけ、今後の通訳研究の方向を定める重要な要因となるであろう。

.....

【著者紹介】

石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 広島修道大学教授。専門は通訳研究。

.....